号外！ 読み聞かせボランティア特集！

HAMA
浜っ子だより
3月3日
（水曜日）
発行
学校支援本部
事務局

科学の本っておもしろい！

二月二十日(土)に講師二名をお招きして、読み聞かせボランティア主催の、科学読み物の読み聞かせ＆工作が行われました。

季節に合わせた「動物たちと冬」をテーマに、質問を織り交ぜながら、子どもの興味を上手く本へ導いていきます。さわりだけを紹介する本、最後まで読む本、どれも次へ次へと関連づけされていて、飽きる事なく続きます。大人でも「へぇ～そうなんだ…」と感心したりしているうちに、計十一冊もの本を読んでいただきました。引き込まれたのは、本の内容だけでなく、その進め方の巧さにもあったと思います。次の本を読み始める前に、その本に関する質問をして興味を引き、集中したところで読み始める。私もクラスでの読み聞かせをしているので、なるほど・・・勉強になったなぁ～と、得した思いです。子どもたちも、質問には積極的に答え、本を読み始めると静かにじっと聞いていました。

工作＆実験は、「音」がテーマ。もぐらは音が聞こえているの？ヘビの耳はどこ？そんな話から、音の伝わり方を簡単な工作で体感しました。子どもたちは、大興奮！ 思わず私も、「ちょっと貸して～」とやってみたくなりました。

化学の本というと、難しく思っていましたが、雪の結晶や動物の冬眠の話と、案外身近なものでした。不思議や疑問の答えがたくさん詰まっていて、読むともっともっと知りたくなる、そんな本の力も感じました。子どもたちは親が思っている以上にいろいろな事を知っていて、好奇心がキラキラ輝いています。そんな子どもたちを見て、『子どもって、かわいい！』と感じました。子どもにも大人にも本当に楽しいイベントでした。

幼稚園児から6年生まで、60 名のお子さんが参加してくれました♪

ボランティアの歩み

地域で「読み聞かせ」活動を行っていた保護者から、是非学校でも「読み聞かせ」をしたいという声があり、平成十七年に一部のクラスで、お楽しみ会の時間に「読み聞かせ」をしました。その後、他のクラスからも「やりたい」と言う声が上がり、次の年学校にお願いして、**「読み聞かせの会」**をたちあげました。その際先生方からの希望もあり、全クラスで実施することにしました。

私の「読み聞かせ」をしていての楽しみは、しばらく読まなくなっていた絵本の数々を手に取った時、「やっぱり絵本は楽しい！」と再認することです。ただ本を読むだけでなく、言葉遊びの本などは一諸に声を出して読んだり、子どもたちにも楽しい時間を過ごしてもらいたいと思って行っています。

今年度から、朝の読み聞かせが減ってしまったことを受けて、伊藤さんが、「もっと定期的に子どもたちに読み聞かせを」と言って下さり、二学期から月二回、**図書室で「読み聞かせ」**をしてくれています。

図書ボランティアは、平成十八年に学校上げての研究発表があり、図書室があまりに汚いので掃除してほしいというお話があり、掃除をしました。その後すぐ、「学校図書バーコード化」の話が区からあったので、流れで本の整理及びバーコード化を行いました。バーコード化後は図書室にパソコンが入るため、今までいつも開いていた図書室に鍵がかかり、図書の貸出返却もパソコンを使うため、大人の手があった方がよいという話から、図書ボランティアを立ち上げました。平成十九年度には、バーコード化及び本の整理（四～五千冊以上廃棄）を行いました。大変な作業でしたが、保護者の方が通っていた頃借りていた、何十年前の本もたくさんあったり、興味深い作業でした。平成二十年からは、バーコードによる本の貸出返却、鍵の開閉といった、図書委員会の子どものお手伝いを開始。せっかくバーコードをつけたのだから、ということで「蔵書点検」という、本がなくなっていないか、未返却の本はないかの確認作業も、夏休み前と三学期の終わりにしました。（なんと、たった半年で百冊近い本が行方不明に？） 平成二十一年度の一学期はほぼ毎日お手伝い出来ていましたが、二学期からはお手伝いの日にちが埋まらないことが多くなり、不定期のお手伝いを募集しても、来てくれる人が決まってきてしまいました。私自身も余り学校に行ける時間がなくなり、来年度は皆さんがもう少しうまく参加出来るように考えたいなと思っています。そんな中、うれしい事に**「ディスプレイをして、きれいで楽しい図書室を」**と言ってくれる方がいて、二学期からはじめてくれました。

「図書ボランティア」をして思ったことは、図書室には、皆さんが思っている以上に楽しい本がたくさんある！と言うことです。利用できる時間は限られていますが、近くにたくさん本があるのにわざわざ買ったり、ましてや読まないなんてもったいないと思います。もっと図書室に来て本を読んでもらいたいな～と思います。そのためには、今後も定期的に本を整理したり、ホコリまみれにならないよう掃除したり、サポートしていきたいと思います。

これからもみなさんご協力お願い致します。（武井）

はじめまして！ 図書ボランティアです。

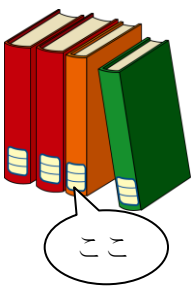
「図書室」というと、堅苦しく足を運びにくいイメージがありますが、そんな事は全くありません。私自身、難しい本、分厚い本などは苦手ですが、子どもたちに本を手にして欲しい、図書室や本をきれいにしたいと思い、このボランティアに参加しています。

浜小では、週一回図書の授業があります。全部で二十五クラスあるため、一週間ほとんどの時間授業で図書室が使われています。それ以外にも、二十分休みと昼休みに図書室を利用できます。あまり人気のない本もありますが、人気があって、とっかえひっかえ借りられている本もあり、様々です。人の手に触れない本はホコリをかぶり、人気の本はページがとれてしまったり、破けたりしているので、私たちはそういった本の掃除や修理もしています。大切な本を少しでも長くきれいな状態で子どもたちに読んで欲しいと思い、修復作業をしています。

みなさんは、本の背ラベルをよく見たことはありますか？三列だけの小さなラベルですが、情報が詰まっていて背ラベルを見れば本の内容も分かります。図書館ほど細かく分類されていませんが、浜小もなかなかのものです。子どもたちはこの背ラベルを参考に、本を元の場所に返却するよう指導されていますが、難しいのか、ボランティアの度に本の整理は欠かせません。順番に並べるだけの単純作業ですが、本の大小で多少順番を入れ替えることもあり、大人ならではの配慮もポイントです。

図書室は夏涼しく、冬は暖かいオープンルームです。いつも外遊びをしている二人の子どもが、私がボランティアの時は様子をのぞきに来てくれます。バーコードを使っての貸出や返却がお気に入りで、五年生になったら図書委員になりたいと言っています。こうした小さなきっかけで本を好きになってくれたら嬉しいと思います。

無理せず楽しみながら、子どもたちの笑顔を身近で見られるので、これからも続けて行きたいです。（奥山）



図書室読み聞かせボランティア

私たちは、毎月二回金曜日の中休みに、第二図書室で読み聞かせを行っています。行事などの関係で変わることもありますが、基本は第二、第四金曜日です。

先日はじめて、読み聞かせを知らせる校内放送をかけていただいたところ、第二図書室がいっぱいになるほどの子どもたちが集まりました。学年は低学年ばかりでなく、四年生以上の高学年もかなり来てくれました。そして、お話を聞く子供たちの真剣な様子・・・・本やお話の好きな子がこんなにたくさんいるのだと、あらためて感じました。短い時間ですが、子供たちはお話の世界に入り込んで目をキラキラさせ、終われば子供ならではのかわいらしい感想を残して行きます。昔話を素話や小さな人形劇ですることもあるのですが、日本のものでも外国のものでも、昔話には不思議な力があって、子供たちには大変よく聞いてもらえます。

グリム童話の「おいしいおかゆ」、これは貧しい女の子が、頼むとおいしいおかゆを煮てくれる不思議ななべを手に入れる。ある日この子の留守に、お母さんがなべにおかゆを頼む。でも止め方はわからないので、おかゆはなべからあふれ出し町中がおかゆでいっぱいに・・・・というお話なのですが、お話のあと、二年生くらいの男の子がふたり、まじめに話し合いながら帰って行きました。「あれはさあ、お母さんがいけないんだよな」「うん、勝手に使うから」・・・。

これまで何年も学級の読み聞かせにかかわってきましたが、低学年のうちは皆が本を読んでいても、高学年になるにつれ、読む子と読まない子がはっきりわかれていってしまう傾向を感じます。でも、思春期に入っていけば、本は成長に合わせて、より必要になりますし、読書力は調べ学習などをする学力にも直結すると言われます。

子供たちが読み聞かせを通じて多くのよい本やお話の世界に触れ、この先ずっと本を友達のひとりとして行ってくれれば、と願っています。

また、読み聞かせをやりたい、と考えている方は、どうぞ一度中休みに第二図書室をのぞいてみてください。

（伊藤）

子どもの頃、図書室はわくわくする場所でした。図書整理のお知らせを見て、…今どきの図書室ってどんなかしら？　１時間でも可？　ならばと、（おそるおそる？　）行ってみました…。本をキュッキュッと磨いたり、並べ替えたり、いまどき人気の本あり、昔読んだ本あり…。なつかしくもあり、楽しいひとときでした。

偶然、図書室の飾りつけや、外の展示ケースも使われていないのでディスプレイしたい…と、図書ボラの方たちが話しているのを聞き…　楽しそうだなぁ参加したいなぁと……。

展示ケースや図書室のディスプレイをちょこちょこと。描いたり、切ったり、貼ったり、つるしたり…。 まだ手探り、数名で試しながら、遊んでいる感じですが…。（通りがかった人に声がけして一緒にやったり…）　子どもたちの笑顔がみられるとうれしいです。

たとえば推薦図書が苦手でも、感想文を書くのが大嫌いでも、ちょっと本が読みたくなるような、わくわくして足を運びたくなるような図書室になるといいなぁと思います。　(I)

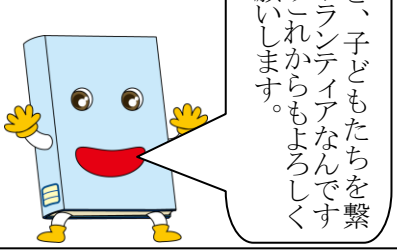
展示ケースのかざりつけ♪

背番号 55 番のひとりごと…

小さかったとき好きだったもの。三十年も前のことを思い出すと胸が温かくなる。公園での野球。友だちが投げたゴムボールが鋭く曲がった。プラスチックバットで左中間に打ち返した。オレンジ色のボールは道路まで飛んだ。ホームラン。得意げにベースを踏んで回った。好きなことに夢中だったことを後悔することはないだろう。子どもには、なんでもいいから好きなことを見つけてもらいたいと願う。

わたしは読書が苦手だった。本が好きになったのは三十歳の時だ。読むことが嫌いではなかったが無理強いさせられ頁をめくることが苦痛だった。読書が好きになったきっかけは一冊の本だった。本は読まされるものではなく自分が選択できるものだと知った。男の価値は蔵書でわかると小泉信三は言った。読んできた本の質と量で人間の厚みが見えるという。わたしの厚みは九年分しかない。欲を言えばもう少し若いときに、本を手にする機会があればとためいきをつく。

きっかけさえあればと言う。勉強でも。スポーツでも。読書でも。しかし、きっかけとはむずかしい。偶然という環境に運命を委ねざるを得ない。偶然はできることなら可能な限りおとなが子どものために用意してあげたい。子どもが本を好きになってくれたら、なんとなく嬉しい。

浜田山小学校三階には図書室がある。図書の授業のほか、午前中の二十分休み、給食・掃除のあとのお昼休みに児童が利用できる。一年生から六年生までの児童たちが図書室を訪れている。ふだん、図書室にはカギがかけられている。カギを開けるのは図書ボランティアのみなさん。図書ボランティアは保護者のお母さんたち四十人以上。スケジュールを工面しながら浜田山小学校まで駆け付けてくれている。カギを開けて休み時間のあいだ、本を並べなおしたりしてくれている。子どもたちが教室に戻ったあと、図書ボランティアのお母さんがカギをかける。一日二回。ひと月におよそ四十回の当番がある。都合がつかずカギを開けるのが一～二分遅れたとき、待っていた児童から「早くしてくれないと、せっかくの読書の時間が」という言葉が聞かれるという。「自分たちの活動が無くても学校は困るわけではないかもしれないけど」と謙遜しながらも、廊下で自分たちを待っている子どもたちを思えば励みになるそうだ。浜田山小学校の図書室には一万冊の書籍があると言う。図書室がなにかのきっかけになる可能性は全校児童にある。十分間でも小学生が図書室に足を踏み入れ、棚を眺めているだけでも偶然というきっかけが待っているかもしれない。

わたしが三十歳まで取り組まなかった読書の時間。児童たちがなにかに気づくことができたとしたら、図書ボランティアのひとたちは歴史をつくったことになる。将来、浜田山小学校の卒業生が金色のトロフィーを片手に受賞のことばを述べるとき「・・・そして、浜田山小学校図書ボランティアのお母さんたちの助けがあっていまの自分がいます。」と言ったら、かっこいい。夢を見るのは勝手だが、図書ボランティアのお母さんたちに、三十九歳も小学三年生の父として感謝したい。